

(4) ナガエツルノゲイトウの防除

ア 特徴

本種はヒユ科に属する南米原産の多年草で、河川・用水路を介して拡大する「特定外来生物」である。1989年に兵庫県で定着が確認され、その後急激に分布を広げた。

茎は中空で横に這うか斜上し、よく分岐して節から根を下ろす。葉は楕円形で縁には細かい鋸歯があり、無柄で対生する。夏から秋にかけて葉腋に細かい柄を出し、先端に直径1.5cmほどの球形の白い花穂を着ける。数センチの茎の切片から容易に発根し、栄養繁殖が極めて盛んで、生長が速い。また、茎や根は千切れやすく水に浮いて移動し、主に用水路等で繁茂する。

生態系や農業へ悪影響を及ぼすので、用水路、水田の水口付近や畦畔を見回り、早期発見・早期駆除に努める必要がある。なお、栽培や移植、販売、譲渡、運搬などは全て禁止されている。

イ 水田における増殖と定着のサイクル

- ①水口から侵入：用水を介して水田に侵入し、水口で増殖する。
 - ②ほ場内にすき込み：水稻収穫後、トラクターでの耕運により断片化しすき込まれる。
 - ③土中で越冬：茎の断片は土の中で越冬する。
 - ④畦畔に埋め込まれる：越冬した茎の断片は畔塗りで畦畔に埋め込まれる。
 - ⑤畦畔に定着：4月上旬頃に茎の断片が芽生え、その後畦畔を覆うように繁茂する。
 - ⑥畦畔から水田に侵入：畦畔に繁茂した後、水田内に茎葉を伸ばす。
- 上記②から⑥を繰り返し、畦畔の繁茂を放置すると土中深くはびこり、駆除は困難となる。

※県内で侵入が確認されている地域においては特に注意すること

[自然保護課 HP](#) の「県内におけるナガエツルノゲイトウの分布図について」より県内の詳細な分布図が確認できる。

ウ 防除のポイント

ナガエツルノゲイトウは刈り払い機などで除草すると、茎葉の断片が水田内や排水路など周囲に飛散して再生し、それぞれ1個体となり増殖を促すことにつながるため、畦畔は除草剤で防除することが重要である。主な有効成分には、ピラクロニル、フロルピラウキンフェンベンジル、グリホサートカリウム塩などがある。また、農機に付着した断片が他の場所でも増殖することもあるので、発生が確認されたほ場の作業は最後に行い、農機をよく洗浄するなど注意が必要である。未侵入水田では、水口(給水栓等)に網を設置し、茎葉の流入を防ぐ。

定着すると駆除が困難な難防除雑草であるため、特徴を十分理解した上で、早期に発見し、生長初期、群落規模が小さいうちに、断片を残さないように丁寧に取り除くとともに周囲への拡散を防止することが重要である。

表 畦畔の防除体系の例

3月下旬	から	4月中旬	6月上旬 から中旬	6月下旬から7月上旬	9月下旬から10月 月上旬
カソロン粒剤6.7 ※畦畔崩壊しやすい 場合	又は	ラウンドアップマックスロード	ザクサ液剤	ロイヤント乳剤 (ナガエツルノゲイトウ の草丈35cmまで)	ラウンドアップマックスロード

表 水田内の防除体系の例

体系防除A (散粒機及び 大型噴霧機使用)	田植え同時から移植後7日	移植後約40日	稲刈り後からナガエツルノゲイトウが 枯れる前(早めに)
	バッチリLX1キロ粒剤	ロイヤント乳剤 ※落水又はごく浅く湛水 (ナガエツルノゲイトウ の草丈35cmまで)	ラウンドアップマックスロード ※発生量が多い場合のみ
体系防除B (散粒機使用)	田植え同時から移植直後	移植後約15日	稲刈り後からナガエツルノゲイトウが 枯れる前(早めに)
	ピラクロン1キロ粒剤	ウィードコア1キロ粒剤 (ナガエツルノゲイトウ の草丈5cmまで)	ラウンドアップマックスロード ※発生量が多い場合のみ

※水田内でロイヤント乳剤を使用する場合については、散布はできるだけ足跡に水が残っている状態で行うが、やむを得ない場合は漏水のない水田に限りごく浅水とし、雑草が水面上に出るようにする。

エ 秋季防除について

(ア) 発生量が少ない場合

手作業で根元から丁寧に取り除き、乾燥後、焼却処分する。

(イ) 発生量が多い場合

収穫作業後には、ナガエツルノゲイトウの上に稲わらが被さった状態になる。この状態で除草剤を散布すると、薬剤が直接かからず除草効果が落ちる。したがって、ナガエツルノゲイトウが稲わらの上部に繁茂してきた段階で、ラウンドアップマックスロードを降霜期までに散布する。

霜が降りてナガエツルノゲイトウが凍ると除草剤の効果が発揮できなくなるため、霜が降りる前に散布する。本剤を散布しても完全に枯死させることはできないため、翌年に効果のある薬剤の防除体系を継続して、発生の低密度化を図る。